

『ハート・ロッカーとラポールとみその亭OKAMEさん』の関係



こ上の写真、アカデミー賞を受賞した映画『ハート・ロッカー』の爆弾処理ロボットに見えませんか？
実はテクアでダクトの掃除用に開発したお掃除ロボットです。ダクトの中に人が入って掃除する必要がないように、遠隔操作でこのラジコンロボットがスイスイと掃除してくれる。。。と、いう発想の元に開発したのですが、これがなかなか思うようには動いてくれなくて。。。ポツでした(笑)。でもその時はみんなアレコレとアイデアを出し合って盛り上がりました！
映画の中でも、これに似た爆弾処理ロボットを使って爆弾を処理するシーンが冒頭に出てくるのですが、やはりこのロボットもなかなか思うようには動いてくれなくて、ポツになってしまい、結局人が爆弾を解体することになり、それが発端で。。。 (続きは映画館で)

『ハート・ロッカー』、これはお勧めです。かなりリアルな作りです。こっちまで心臓がドキドキしてきます。何がこんなにドキドキさせるのかと考えてみたのですが、これは『ラポールの無さ』に起因していると気づきました。

『ラポール』とは、セラピーやコーチングなどで使用される用語なのですが、『心のつながり、きずな』のような意味を表します。これがないと人はとても不安な状態に陥ります。4月に新しいクラスになって、だれも親しい友達がいなかったときの心細さもラポールの欠如から発生します。目には見えなくとも、ラポールがあるからこそ、人は安心して生活できます。それがラポールというものです。

さて、映画『ハート・ロッカー』はイラクに出兵され、爆弾処理班に任命された若者たちの物語です。街中、そこらじゅうに仕掛けられた爆弾を処理する任務なのですが、イラクという異文化のなかで、危険物を処理するときの緊張感、疑心暗鬼、心細さ、孤立感、命の軽さ、無意味さが見事なカメラワークで表現されています。

ラポールがまったく無いイラクに訪れ、街中でイラクの民間人が遠目で見ている中で、爆弾処理を行う。そのときにふと目に入る光景が、ものすごくラポールの無い怖さを思い知らせてくれます。イラク人が何気なく持っている携帯電話が爆弾の起爆装置に、ビデオカメラが銃に、影りの深い眼光が、憎悪の眼差しに見えてくる。イラクの民族音楽が呪いのまじないに聴こえて来る。この日常どこにでもある風景が、ラポールが欠如しているがために恐怖の映像と変わる。これがこの映画の見ごたえのあるところだと思います。

先日、リメンバー3.17 テクア安全大会が開催されました。今回の講師は、言わずと知れた命のバトンタッチをする会の鈴木中人さんと、昔、王さんや長島さんが素振りの練習をしていた宿舎だった、名古屋の栄にある、みその亭のOKAMEこと、與語淑子さんでした。與語さんはガンで闘病中にもかかわらず、素晴らしいお話で、われわれの心の糸をピン！と張ってくださいました。われわれも與語さんの気持ちに応えたかったので、前日に田中さんと紀くんと柴田ちゃんと自分で、蒲郡まで30キロ歩いて、『ガン封じ』のお札をもらって帰ってきて、プレゼントさせていただきました。

人が生き生きするのは、目に見えないラポールがその場に満ち溢れているときだと思います。気持ちには気持ちで応えるラポール集団。社員の安心が現場の安全を作る！進むべき道は視界良好です。

感謝！ 羽原篤史

